サービスラーニング　クラス活動報告書

活動先名：ＮＰＯ法人　孝行の会

提出年月日：12 月 8 日

1.　活動先紹介・私たちの活動内容

ＮＰＯ法人孝行の会では、誰もがやがて迎える「老い」に向き合い、その暮らしをともに助け合うという精神のもと、訪問介護を行っています。今ではあまり耳にすることも少なくなった「親孝行」の精神を大切にしています。利用者のほとんどが一人暮らしで、孝行の会は利用者の子どもに代わって利用者に寄り添うサービスの提供や活動をしています。主なサービスは以下の通りです。

・介護保険部門（介護保険制度に沿って行っているサービス）
　身体介護、家事援助
・有償部門（独自に行っているサービス）
　移送サービス

また、在宅福祉という現場には、体が思うように動けず家の中で日々すごす方ばかりだと考えたため、利用者に楽しい時間を過ごしてもらえるような企画をたて、以下のことを実行しました。

- 利用者さんに対して
  - ・一緒に歌をうたう
  - ・写真を撮る
  - ・サービスについて質問する
  - ・若いなりのコミュニケーションをとる
- ヘルパーさんに対して
  - ・インタビュー

2.　当初の活動目的・目標

- 利用者さんに対して

楽しませるのではなく一緒に楽しむ

- ヘルパーさんに対して

利用者さんだけでなくヘルパーさんの視点を知る

3.　活動における疑問・問題点

企画を行うにあたり、わたしたちの世代と利用者の世代が異なっているという点を考慮していなかった、企画の内容が漠然としていたということから、活動が始まっても思うように実行に移すことができなかった。自分自身の考えを押し付けるのではなく、サービスを受ける者の立場になって行わなければ、福祉とは言えないということに、気づくことができた。

4.　サービスラーニングを通して学んだこと・理解したこと・成長したこと

・ＮＰＯ・孝行の会に対して

私たちは活動に入るまでの学びの中で、ＮＰＯ法人は必要性を感じた人たちの手で創り出されてきたことを知りました。地域住民が創り出したものであるためＮＰＯ法人について私たちは、地域住民に密着しており気軽に集まれる場所というイメージを持っていました。また、孝行の会に対しては 50 歳代以上のヘルパーさんが多いことを知り、利用者と介護者の年齢が近いからこその関わりがあるのだろうと期待しました。

・企画を通して、“人に喜んでもらうことが自分自身の喜び”

活動中、私たちは利用者に歌を歌う、写真を撮ることを企画、実行しました。利用者とコミュニケーションをとる際に、好きな曲をストレートに聞き出すことができず、曲を調べるのに時間がかかってしまう、自分たちで準備してきた曲を歌ってみても世代が大きくずれていたため、わからないと言われてしまうといった問題に直面しました。最終的に、昔ながらの音頭を歌うことで、一緒に楽しむことができました。

私たちは企画を通して、ＮＰＯ団体の実際の活動に密着してみて、理事長がおっしゃっていた“人に喜んでもらうことが自分自身の喜び”という言葉の意味を、学ぶことができました。普通の暮らしのチョットした心の喜びが人と人を繋ぎお互いの支えあいになっていると思いました。

・地域におけるＮＰＯ団体の必要性

ＮＰＯ団体は、それぞれの地域の特性を知った上で必要だと考えられるサービスをつくり出しています。また、地域にはどんな困難を抱えた人がいて、どんな場所があったら地域住民の生活の質の向上につながるかを常に考えている団体であると捉えました。もし、行政がＮＰＯ団体が独自のサービスを行っていたとしたら、満遍なくサービスが行き届いていないだろうと感じました。地域住民からつくり出されたものだからこそ地域住民からの要望に柔軟に対応できるのだと気付き、地域におけるＮＰＯ団体の必要性を実感しました。

5.　活動の提案

・介護保険制度の充実性（医療行為）

私たちが活動する中で、利用者にサービスを提供するにあたって介護保険制度の壁があることがヘルパーへのインタビューによってわかりました。それは、ヘルパーは利用者に医療行為ができないということです。この介護保険制度の縛りによって、ヘルパーはやりづらさを訴えていました。また、利用者にとってもこの縛りは負担になっています。在宅で医療行為をするには訪問看護が必要になります。しかし、訪問看護を毎日利用すれば利用料の額が大幅に跳ね上がることになり、経済面を圧迫します。もし、訪問介護で医療行為ができるようになれば、利用者の負担が軽減されるのではないかと考えました。

・他団体との協力（移送サービス）

孝行の会では、有償部門の一つとして移送サービスを行っています。要支援、要介護認定を受けていない住民からのニーズに応え、自宅から病院などへの移送を行っています。私たちは、このサービスが広範囲に広がればこれまで移動手段で困っていた多くの人々の負担の軽減にもつながるのではないかと考えました。しかし、広範囲に浸透していけば孝行の会が担う役割は増し、その分負担も増します。だからこそ、他団体と協力してサービスを提供していくことが求められるのではないかと考えました。移送サービスに限らず、その他のサービスでも他団体と協力することによってサービスを必要としている人たちが区域で縛られることがなくなるのではないかと考えました。

・利用者さん同士で関わりあう機会の必要性

在宅介護の現場では、利用者とヘルパーの関係で成り立っているため、利用者同士が関わる機会がありません。関わる機会があれば、利用者にしか分からない喜びや苦労、心配事などを共有でき、それぞれの心の安定を図れるのではないかと考えました。また、話す機会を与えることで、利用者の新たな一面を知るきっかけになると思います。利用者さんの多くは一人暮らしの方や、日中家に家族の方がみえない方ばかりでした。誰かと話したいと思っていても一人では行動できなかったり、移動手段が限られたり、人に会うことすら一苦労です。一箇所に集まってもらうことは困難かもしれませんが、人と関わる機会が必要だと感じました。

6.　グループ研究の成果を踏まえて今後の学びにどう生かすかの抱負

・“人に喜んでもらうことが自分自身の喜び”

今回の活動から、“人に喜んでもらうことが自分自身の喜び”ということを学ぶことができました。これが孝行の気持ちの一つなのではないかと思います。核家族、高齢者の独居が増えているなかで、今では耳にすることが少なくなった「親孝行」の精神を、周囲の同世代、次世代に広げていくことが、いまの私たちにできることではないかと考えます。自

分自身だけで学んだことを、とどめてしまうのではなく周囲に知っていってもらうことで、親子関係を育み、生きるということに向き合い、充実性のある暮らしにつながるのではないかと考えます。

・地域のネットワーク

一人暮らしの方や日中家族の方が仕事に出ていない方が多いことから、他団体との協力を含めて、地域住民のネットワークが必要になってくると考えました。核家族化が進む中で地域のネットワークの構築の重要性が大きくなってくると思います。各個人、各集団のつながりが広く、強くなることで地域住民一人ひとりの安全、安心につながると考えました。地域によって特色はさまざまですが、これからの社会を担う一員として地域のネットワークについて考えていきたいです。